

屯田兵関連記録にみる西南戦争

宇城市周辺の戦闘経過を中心に

内山 幹生

[目次]

序

1 屯田兵制度と『西南戦争従軍記録』

①戦局の展開

②屯田兵出兵と衝背軍の編成

2 松橋の戦

①別働第一旅団第二連隊黒木連隊長の報告

②別働第一旅団(三月二十九日改称)の松橋進出

③薩軍松橋を放棄

3 戦場の新技術

①軍用電信

②新兵器の実験場

4 松合病院の開設と兵站基地

①開院と病舎

②病舎規則

③中継基地

結

序

現宇城市小川町や松橋町など旧五カ町が、最後の内戦といわれる西南戦争の主戦場の一つであったことは、市民の間でも意外に知られていない。植木方面や熊本市内の戦闘を別にすると、松橋を中心とした双方千人単位での衝突は、鹿児島および宮崎県を含めても西南戦争五大戦場の一つにも数えられるだろう。しかし平成の現在では、八代方面から上陸してきた政府軍と、それを阻止しようと熊本城攻囲勢力の一部を南下させた薩軍が、松橋近辺で、小競り合いを繰り返した程度に認識している人が多い。

二―三世代以前の人々には、子供の頃にこの戦いを実見した人もいれば、実際に政府軍に協力した大小区制下の役場職員もいた。もはや遠い記憶でしかない歴史上の事件となってしまったが、昭和二〇年代から三〇年代初頭頃まで、こうした人々が確かに存在していたのである。日本史上の大事件でも、時の経過とともに忘れ去られるのは仕方ないことだが、それは各人各様の記憶が、まとまった形で記録されていないことが原因があるだろう。しかし、今となつては、多少の伝承こそ残っていても、その聞き書きを編纂すること自体が絶望的である。

明治後期以来、陸軍参謀本部編の戦闘経過記録や薩軍従軍者の記録など、多数が刊行されており、その中にも松橋方面の戦闘は、ある程度の精度と分量をもって記述されている。しかし、今回の論考を起稿するに際し、掘り所としたのは、こうした従来の刊行資料ではなく、北海道以外でほとんど世に出たことのない北海道開拓使の記録『八代

口征討参軍本営公文録』(13冊)で、すべて当時の原史料を綴ったものである。

関連部分を縦覧するに、現場指揮官の戦闘報告や作戦命令書から、兵站実務および戦場での給与実態など、あらゆる分野にわたっており、明治一〇年三月二六日から四月初めまでの現宇城市管内の戦闘経過や政府軍の活動指針も抽出することができる。これらの史料からみえてくる「松橋の戦い」を、その一端なりと再現してみよう。

1 屯田兵制度と『西南戦役従軍記録』

明治四年(一八七二)、明治新政府の廢藩置縣によって大量の士族が失業した。その救済策の一つとして、北海道警備と開拓の任にあたる屯田兵制度が、開拓使長官黒田清隆の建議によって同七年に創設される。同八年(一八七五)に至り、最初の屯田兵が札幌の琴似村(こと同じむら)へ入植した。制度開始当初は、士族を対象として募集していたが、明治二年(一八八九)一月の屯田兵召募規則で、属籍に關係なく志願できるようになり、農民出身者が多くなった。

明治一〇年(一八七七)、薩摩の西郷隆盛らを中心とした士族の反乱、西南戦争が勃発し、これに琴似村(現札幌市)の屯田兵第一大隊第一中隊と山鼻村(同市)の屯田兵第一大隊第二中隊が、四月九日に出征の内命を受け出征するも、同年八月一六日には帰還命令を受けた。九月三〇日に札幌に帰ったが、その遠征の全貌を記録したものが、北海道立図書館北方資料室の所蔵する、『西南戦役従軍記録』五五冊である。

総数五五冊のタイトルは次に示すとおりで、屯田兵を所管する組織が開拓使の屯田事務局(後の「屯田事務係」)に置かれていたので、これらの文書のほとんどは、「開拓使」と名の入った野紙が使用されている。加えて、陸軍中将黒田清隆や同山縣有朋を含む高級指揮官からの命令書や前線指揮官の戦闘報告から、行政末端の吏僚や間諜・探偵の起筆した報告書に至るまで、多様な種類の文書が綴られ、道立図書館北方資料室では、貴重な原史料群と評価している(文書タイトルに付した番号は、筆者が便宜上採番した)。

- ①『屯田兵出征目録』(日録カ?)
- ②『屯田兵出征公文録』
- ③『従軍出張姓名簿』
- ④『西南公文録 草稿』
- ⑤『西南役文書』
- ⑥『西南事件雑書』
- ⑦『分捕品賊徒名簿并日記』
- ⑧『暴徒発配一件』
- ⑨『八代口征討総人員名簿』
- ⑩『参軍本営人名』
- ⑪『鹿児島出張日誌』(5冊)
- ⑫『鹿児島出張日誌附録』(4冊)
- ⑬『鹿児島出張日誌抜粹』
- ⑭『鹿児島紀行附録』
- ⑮『肥薩従行日誌』(2冊)
- ⑯『西京出張日誌』(4冊)
- ⑰『八代口征討日誌摘要』
- ⑱『八代口行営公文録』(3冊)
- ⑲『八代口征討死傷概要』
- ⑳『八代口征討戦記』
- ㉑『衝背軍軍団記事』
- ㉒『軍団紀事原稿』(2冊)
- ㉓『戦闘報告類』
- ㉔『警報摘要』(3冊)
- ㉕『賊軍河尻墓標録』
- ㉖『八代口征討参軍本営公文録』(13冊)
- ㉗『西南警報原本 乾』

これらの全貌を本稿で紹介することは、紙幅の関係からも、その膨大な文書量からみても不可能である。この文書群の中で、熊本におけ

る戦闘を中心として詳細に記録されているのが、②の『八代口征討参軍本営公文録』（13冊）である。本論考は、この文書を中心に書き起こした。屯田兵部隊は、明治一〇年四月九日に出征の内命を受け、熊本城下の西北方百貫港に到着したのは四月二三日であった。そのころ熊本県央の戦はほぼ終息しており、したがって屯田兵部隊の実戦参加は、彼らが配属された別働第二旅団の人吉到着、すなわち五月一日以降ことである。

屯田兵部隊は、熊本城下にあつた薩軍主力を、南北から挟撃する目的で設定された衝背軍（背後から衝く部隊）に編入されており、衝背軍の先陣は、明治一〇年三月一九日、八代方面口の日奈久（二見洲口）から上陸した。衝背軍の構成は、山田顕義少将の別働第二旅団（後の別働第一旅団）と川路利良少将兼警視庁大警視の別働第三旅団で、屯田兵部隊の実戦投入は、戦役後半の人吉以南における戦場である。『八代口征討参軍本営公文録』（※以後『公文録』と略称する）には、西南戦争における屯田兵の活動のみが記録されているわけではなく、彼らの活動記録よりも政府軍全体の動向がはるかに多く書き留められている。

本史料には、屯田兵部隊の編成に関することや動員に関連する兵站や人事、そのほか諸連絡および命令や各地における戦闘報告書、復命文書がふんだんに綴られている。その中から、現在の宇城市の旧町域および周辺域における戦闘や部隊の移動、それに伴う戦闘記録や野戦病院のことなど、その一端を紹介する。従来の戦史にはあらわれていなかったことも多く、地域の近代史における新たな発見も数多いことに注目したい。

黒田清隆ほか、政府要人や軍高官記述の原史料が数多く綴られていることも、『公文録』の特徴である。その理由の一つは、次の上申書に窺うことができる。

征討参軍本営公文録進達の上申

八代口征討日誌摘録進達ノ義上申

清隆、征討軍在任中八代口征討顛末ノ義可上申有之

處、各旅団ノ報告書等全備致サ、ル向モ有之ニ付、

清隆手記ノ帳簿等ヨリ摘録略図相添、不取敢進

達仕候、猶詳細取調追テ御届可仕候也、

明治十年四月

参議黒田清隆

太政大臣三條實美殿

黒田は、以後の作戦計画に資する目的から、征討参軍職在任中の書類整備、すなわち八代口からの薩軍征討任務中の顛末を記した日誌、さらに各旅団からの諸報告書類整備を図ったのである。指揮下の旅団は、別働第一〜第四旅団であるが、明治一〇年四月時点で、参軍の本営にその報告書類全てが備わっていたわけではない。黒田以下、本営の各級指揮官は、情報系統を掌握しておく必要がある、大軍を運用するため、それらは統一的な基準で作成し整備されていなければならぬ。この視点から、多くの報告書および日誌類や上申書に命令書、帳簿類に至るまで、膨大かつ多方面にわたる書類が作成され、集中分類されたのである。

①戦局の展開

既刊の諸文献（参謀本部陸軍部編『征西戦記稿』など）および北海道屯田倶楽部HPなどより、同戦役における屯田兵団の動向および戦局の展開を時系列にまとめておく。

◎明治一〇年（一八七七）

一月三〇日 鹿児島で私学校生徒が決起し草牟田火薬庫を襲撃。

襲撃。

二月一五日 西郷隆盛ら薩摩士族の一団が鹿児島を出発。

二月二九日 政府は「賊徒征討令」を發布し、動員令を各鎮台に下令。

鎮台に下令。

二月二日 熊本鎮台（熊本城）攻撃開始（四月一四日まで）。

で。

二月二七日 屯田兵一小隊を函館警備に派遣（実際は人員補充目的）。

補充目的）。

三月一〜三二日 田原坂での戦闘。

三月一三日 北海道開拓使長官陸軍中将黒田清隆は征討参軍に就任。

軍に就任。

三月一四日 衝背軍として別働第二旅団（後に別働第一旅団と改称）が編成される。

団と改称）が編成される。

参軍に黒田清隆、司令長官に高島鞆之助、歩

兵四個大隊と警視隊で合計

兵力四〇〇〇名。

三月一九日 別働第二旅団の黒木隊・高島隊の七〇〇名が

が八代口（日奈久洲口）に上陸し八代へ進撃。

一方、薩軍はこれに応じ、永山盛弘（通称弥一郎）指揮する一隊が川尻本営より迎撃に出る。

三月二〇〜二五日 衝背軍と永山盛弘指揮下の薩軍が、宮原・鏡

近辺で激戦。

三月二一日 参軍黒田清隆、歩兵と警視隊計五〇〇名を率

いて日奈久に上陸。

三月二四〜二五日 山田顕義少将指揮下の別働第二旅団、川路利

良少将兼大警視指揮下の別働第三旅団が八代

口に上陸。

三月二六日 小川で激戦。政府軍が勝利し、永山薩軍は松

橋へ後退。

三月三〇〜三二日 松橋陥落。薩軍は宇土へ転ず。

四月一日 永山薩軍は宇土でも敗北し、緑川を挟んで滞

陣。

四月四日 辺見十郎太・別府晋介率いる薩軍別働隊は、

人吉から八代へ来襲し政府軍を背後より攻撃

するが、有力な増援部隊に阻まれて撤退。

四月九日 黒田清隆は屯田兵出征準備を内命する。屯田

事務局は、堀基准陸軍大佐を本部長にして、

第一大隊長に准陸軍少佐永山武四郎を任命し、

第一中隊（琴似村）・第二中隊（山鼻村）の

合計六四五名で遠征軍を編成した。これに東

京で募集した夫卒五〇名が九州で追加され、

屯田兵第一大隊は七〇〇名ほどに達した。

四月一〇日

堀基准大佐指揮下、第一大隊六四五名からなる屯田兵遠征軍が札幌を出発し、銭函に泊す。

五月二六日

薩軍の鹿児島奪還失敗。

四月一日

屯田兵遠征軍小樽着。家村准大尉以下の函館派遣隊が本隊に編入される。

六月一日

政府軍、人吉を攻撃し陥落させる。屯田兵遠征隊は山田郷に突入して人吉城の薩軍を攻撃。

四月二日

黒川道軌第四旅団長代理率いる別働第四旅団を加えた政府衝背軍が緑川渡河を開始。

六月四日

政府軍人吉制圧。薩軍人吉隊長は別働第二旅団に降伏。

四月三日

永山盛弘（弥一郎）が御船で自決。

七月二四日

各旅団は、薩軍の新拠点都城を攻撃。屯田兵遠征隊も参戦し薩軍敗走。

四月五日

参軍黒田清隆は熊本城へ入城し、遅れて入城した山縣有朋と対面。

八月一日

別働第二旅団長より屯田兵部隊へ引き揚げ命令。

四月八日

屯田兵遠征隊は、汽船太平丸で小樽を出港。

八月二日

屯田兵遠征隊、船で鹿児島市へ移動。

四月二三日

黒田清隆は征討参軍を辞任。同日、屯田兵遠征軍は熊本県百貫港に上陸。

八月二日

屯田兵遠征隊、神戸に寄港す。

四月二七日

別働第二旅団に編入、八代口より人吉の西郷軍を攻撃すべし」との命令を受ける。

八月二〇日

屯田兵遠征隊は横浜に上陸し、列車で東京へ。同地で屯田予備隊と合流。

四月二八日

屯田兵遠征隊は小島町の宿营地を出発。

九月一日

薩軍、鹿児島に着く。

四月二九日

別働第二旅団が人吉盆地に入る。主力は球磨川南北両岸を進撃したが、薩軍の反撃にあう。

九月二日

明治天皇、吹上禁苑で屯田兵部隊および屯田兵予備隊を閲兵。

五月一〜九日

別働第二旅団は人吉西方の山岳道より進撃。

九月二四日

西郷隆盛、鹿児島城山で自決し西南戦争終結。

五月二日

屯田兵遠征隊が大河内の薩軍を攻撃し敗走さ

九月二九日

屯田兵遠征隊は、函館を経て小樽へ入港。

五月一九日

以上の経過から知られるように、屯田兵団は、結果的に熊本県中央

部の主戦場へ投入されることはなかった。彼らは第二旅団へ編入された後、敗走する薩軍部隊を人吉方面から都城へ追撃し、約三ヶ月ほど戦場にあつたが、秋風の吹き始めた九月末には故郷へ凱旋している。本稿では、屯田兵团の活動を明らかにすることではなく、関連史料のうちより、現宇城市管内およびその周辺における戦闘推移とその背景を抽出することにした。

② 屯田兵出兵と衝背軍の編成

ところで、屯田兵派兵のことについては、『公文録』の一、「御沙汰書并御伺御届之部」に、次のような伺い書が綴られている。

到着ノ屯田兵御差向方ノ義伺

背後攻撃ノ義ハ戦列線広漠ニシテ多数ノ兵ヲ要スル為メ

屢々後備兵繰出ノ義申セシ折柄、屯田兵志願ノ趣モ

有之候ニ付、太政大臣へ御届ノ上出兵ノ義相達置候處、追々

賊勢挫折熊城連絡相通シ候ニ付、出兵見合ノ義ヲモ相達

置候得共、汽船ノ都合ニ由り東京長崎等へ着港無之、昨

二十三日直二百貫沖へ到着ノ旨届出候處、最早兵員不用ニ属シ

候義ニモ可有之候得共、未タ全ク平定ニ至ラス、

此際何レニ力御差向ケ相成度、併鹿兒島へノ出兵ハ堂々タル

台兵御差向ケノ義ト存候間、彼所へノ出兵ハ御見合相成度候、

此段相伺候也、

熊本城を攻囲する薩軍に対し、背後より攻撃する目的で衝背軍が編成されたが、上陸地点の八代口（日奈久・八代）から北上するには、連続する干拓平野があつて戦線が広漠としているため、多数の兵力を

必要とする。後備兵の増援を具申ししたが、北海道屯田兵团の志願するところもあつて、太政大臣命で屯田兵第一大隊に出兵を達せられた。しかし四月に入って松橋陥落のあと、南下した薩軍分遣部隊の勢いもほぼ頓挫し、一五日には政府軍（衝背軍）の熊本城入城を許してしまう。戦況の好転から、遠征軍（屯田兵第一大隊）の出兵見合わせも急ぎ建議されたが、「汽船ノ都合」もあつて熊本城開城当日、小樽港を出港した。

四月二三日、遠征軍は熊本市郊外の百貫港へ到着する。この時期、熊本周辺での戦いはすでに峠を越え、薩軍は体制立て直しを図るため人吉に集結しつつあり、彼らが鹿兒島へ向かうのは自明の理で、政府軍は追討して撃滅する方針であつた。こうした状況をふまえ、この伺いの起案者は、屯田遠征軍の増援に疑問を呈するものの、まだ平定に至っていないことを危惧している。それで、鹿兒島への出兵は「堂々たる台兵」、すなわち正規軍たる鎮台兵の派遣を提案し、屯田兵の出兵見合わせを、伺いの形で提案したのである。

参議兼陸軍中将（参議Ⅱ集団指導制下の政府首班）黒田清隆は、明治一〇年三月に入り征討参軍に任命されると、京都行在所宛ての電報で薩軍の背面攻撃を建言して容れられ、衝背軍を指揮することになった。三月一四日、高島鞆之助大佐指揮する別働第二旅団（のち別働第一旅団と改称）兵力四〇〇〇名が編成され、三月一九日には、早くも同旅団の黒木為楨中佐の二個大隊と高島大佐の一個中隊と警視隊、合計七〇〇人が日奈久洲口に上陸する。三月二一日、黒田は歩兵と警視隊五〇〇人を率いて、同じく日奈久洲口からの上陸に成功し、その後数日において、山田顕義少将指揮下の別働第二旅団主力と川路利良少

將指揮する別働第三旅団が八代から上陸した。

八代日奈久洲口に上陸した政府軍、すなわち熊本城を攻め囲む薩軍の背後を衝く、黒田参軍指揮下衝背軍の基本戦略は次のようなものであった。

自今戦畧見込概述スル左ノ如シ、

一松橋ヲ以テ惣軍ノ本営機據トスル事、

一日奈久八代其他我軍ノ背後ニ在ル諸方守備ノ兵ハ、悉ク之ヲ引揚

ケ松橋隈ノ庄ノ間ニ

纏メ惣勢ノカラ一ニ合シ宇土ヲ抜キ、川尻ヲ攻メ終ニ熊本城下賊

ノ本営ヲ打抜テ以テ

目的トスル事、

一右宇土ヲ抜ク時ハ、寄陽へ之海路連絡ヲ開タルニ付、手負其他之

運輸物等ハ惣テ

該所ヨリ輸送スヘキ事、

一現今八代ニ在ル手負人等ハ、惣テ寄陽へ可有回着シ、回送出来サ

ル者は松居（松合）

ニ移シ可然事、

右ノ方略ニ候得ハ、後軍ノ来着ヲ待タスシテ可ナランか、譬へ

我背後ニ突入ストモ

決シテ患フヘカラス、必一方面ヲ抜キ目的トスル、賊ノ機據熊

本城下ニ達スレハ、

高瀬口等ノ官軍ト示カヲ合スベシ、着シ果シテ背後ニ残賊ノ突

出スルアラバ、

之ヲ平定スル難キニアラサルベシ、

衝背軍各旅団は、この戦略見込みのとおり、薩軍の分断と駆逐に成功する。黒田は、作戦の成功を見定めると、四月一七日に参軍辞任の書を京都へ打電し、四月二三日、征討参軍を正式に辞任するが、この日は、奇しくも屯田兵の一隊が百貫港に上陸した日でもある。黒田参軍指揮下の衝背軍は、三月二六日から三月末にかけて小川・松橋の戦闘で勝利し、一部は熊本城下へ入り、籠城軍と会同した。黒田は、征討参軍としての職責を果たしたあと、退任するにあたって次の告諭を發する。

各旅團懸

賊徒熊城ニ逼リ猖獗スルノ際、背撃各旅團ノ將卒嶮ヲ扼シテ奮戦シ

群賊ノ圍ヲ掃除シ、竟イニ能ク該城ニ連絡ヲ取り前面ノ本軍ト會合シ背撃

ノ目途ヲ違ス、則チ將卒ノ忠勇盡力ニ因ルモノナリ、今要地ヲ守備シ

分散ノ賊を追撃スル等ノ方畧ハ則チ總督或本營ノ令ヲ俟ツモノナリ、

然ラハ各国ノ將卒休戦ニ弛マス前捷ニ誇ラス自ヲ守リテ行状方正以テ

軍威ヲ傷害スル事ナキハ固ヨリ確信スル所ナリト雖尚ホ各旅團長ニ

於テ所轄ノ兵隊え嚴重告諭可致置趣旨相違候事、

明治十年四月十六日

征討参軍黒田清隆

衝背軍は薩軍の熊本城攻囲を解いて鎮台司令部との連絡に成功し、田原坂を通過してきた本軍および籠城の鎮台兵力と合流したが、各地に分散する薩軍を追討する任務が残っている。その命令が出るまで、しばらくの休戦期間があり、その間の軍規保持と戦意の維持を通達したのである。

2 松橋の戦

松橋の戦とはいっても、明治一〇年段階での要衝松橋を中心とした戦いという意味で、西南戦争関連史料をみると、「松橋の戦」なる文言は、政府軍と薩軍双方に共通の表記としてあらわれる。娑婆神峠や豊福村・下郷村などでの戦闘も、豊川地区の旧御船村や南北松崎村での戦闘も松橋の戦いで括られており、現在の宇城市域内であれば、三角町を除く旧四カ町が、ほぼ「松橋の戦」の範囲と理解してよい。

①別働第一旅団第二連隊黒木連隊長の報告

現在の宇城市管内および周辺における戦闘内容は、「公文録 六」の中で、詳細に記されている。その一部、現豊川地区から松橋地区での戦況を示しておく。なお原文の漢字は旧字体で書かれているが、新字体に改めた。

三月二十七日休戦（※遺体収容など戦線整理のためか）

同 二十八日休戦

同 二十九日休戦

同三十日午前第四時半、我連隊鏡村発軍、砂川ノ哨兵ヲ越エテ南



西南戦争当時別働第一旅団 第二連隊長陸軍中佐
黒木為楨（写真は陸軍大将当時）
大正二年至誠社「華族画報」※旧薩摩藩士

豊崎村ヨリ海辺御船村ニ至ル迄一線ニ松橋駅ニ向テ進軍ス、然ルニ賊兵等我軍ノ急進ヲ懼ル、ヤ、前夜御船村ノ堤上ニアル処ノ汐留ノ水門ヲ破リ、我軍進路ヲ障碍ヲ作（策）ス、是ニ由テ南豊崎村ニ至ル迄田畑間ノ諸溝へ潮流、潮ノ南豊崎村ノ外面ヨリ進軍スルヲ得ス、依テ遠撃ス、時ニ松橋駅筋本道ノ戦ヒ烈シクシテ、我連隊ノ内ヨリ第二大隊第二中隊ヲ援兵トシテ久具橋ニ出ス、途中ニ於テ賊ノ砲撃劇烈ナルヲ以テ該隊ハ狙撃隊ニ合シ、賊ノ拠所トスル砲台ノ側面ヨリ発射シ、重ネテ接戦シ賊五名打取り砲台ヲ乗取り、砲一門二兵器若干ヲ得タリ、当夜、第一大隊第一中隊同四中隊第二大隊第一中隊ヲ以テ本道ニ応援ス、夜ニ入テ戦ヲ止ム、

同三十一日、本道ノ攻口ニ於テ先鋒ノ命ヲ蒙リ午前第七時ヨリ第

一大隊第四中隊八第一連隊ト合シ下久具山ノ賊ヲ進撃テ烈戦遂之ヲ走ラス、第一大隊第一中隊第二大隊第一中隊八午前第七時豊福村ヨリ進撃、隈庄越エノ山上ニ戦フテ賊ヲ追越、午後第三時松橋駅ニ至ル、是ヨリ先キ我連隊ハ北豊崎村ヨリ御船村ニ至ル迄、午前第十時迄ノ干間ニ乗ジ進テ、賊ノ左翼ヲ追撃ス、賊敗走ス、同第十一時三十分、惣軍進テ松橋駅ヲ乗取ル、賊ハ宇土ニ走ル、我聯隊より宇土口ノ哨兵ニ第一大隊第二中隊第二大隊第二中隊ヲ配布ス、

第四月一日午前第四時十分松橋駅宇土口ト哨兵ヲ賊襲撃、夜二乗ジ溝畔ヲ思ヒ哨兵線ニ来リ直接戦スルノ報アリ、直ニ第一大隊第四中隊第二大隊第三中隊ヲ応援トシテ操出シ、直ニ哨兵増加ス、時ニ天漸ク明ケタリ、共ニ烈戦シテ賊三十余名ヲ打取ル、賊即チ隊伍ヲ乱シ走ラス、我軍其機ニ乗シ氣ヲ発シテ追撃ス、賊愈走ル、追テ宇土駅ヲ取ル、

賊ハ緑川或ハ三十町村ニ向テ敗散逃走ス、依テ哨兵ヲ右翼ハ緑川太郎兵衛渡シノ南堤ヨリ、左翼ハ住吉ノ海浜ニ至ル迄配布ス、右三日間ノ戦争并死傷人名ハ別紙ノ通、尚詳細ハ追テ取調可及上申不取敢此段御届申候也、

明治十年四月六日 陸軍中佐黒木為楨

陸軍少将高嶋頼之助殿

報告者黒木為楨(ためもと) 中佐は、別働第一旅団第二連隊長である。この報告によると、黒木連隊は三月三〇日の払暁、鏡村を出発し、砂川の哨兵線を越えて南豊崎村から海辺を北上し、御船村まで一列縦隊となつて松橋駅を目指した。「松橋駅」とは、松橋宿場ほどの意味で、旧藩時代の「厩」(うまや)があつた場所をさす。小川宿と宇土

宿の中間にあつて半宿を形成し、人馬継ぎほか物流や宿泊拠点のあつたところである。現在の松橋駅通りと直近の高良界限に比定できる。南西部を固めていた薩軍分遣隊では、衝背軍の急進を警戒して、前夜御船村の潮除け堤防に設置されている水門を破壊し、干拓地に導水して進路妨害を画策していた。

そのため、御船村から南豊崎村に至るまで、田畑の通水路より海水が溢れ、南豊崎村外縁を通つて進軍することができず、やむなく遠方からの射撃を開始する。松橋の本道筋でも激しい戦闘が始まつており、黒木は、指揮下の第二連隊より第二大隊第二中隊を増援として久具橋へ派遣したが、途中大野台地の薩軍砲台より四斤山砲の連射にあう。この砲台を沈黙させるため、同連隊の狙撃隊と合流し、砲台の側面から攻撃して接戦の末これを確保し、砲一門と兵器若干を得たが、戦闘は夜になつて止んだ。

翌三一日、本道の攻め口において、午前七時より第二連隊第一大隊第四中隊は、茨木惟昭中佐指揮する第一連隊と合流し、久具台地の薩軍を攻撃しこれを潰走させた。第一および第二大隊の各々第一中隊は、午前七時に豊福村を出発して隈ノ庄方面へ迂回し、午後三時には松橋駅に到着する。これより先、第二連隊主力は、北豊崎村から御船村へ進み、午前一〇時からの干潮に乗じて干潟から上陸し、薩軍の左翼を襲い、これを宇土方面へ追い込む。

四月一日の午前四時一〇分、松橋駅と宇土口に配置していた歩哨の一隊が襲撃を受ける。第一大隊と第二大隊から応援を繰り出し、応戦したところで夜が明け、激戦を制して薩兵三〇余名を討ち取り、そのまま宇土を制圧した。薩軍部隊は、緑川方向と三十町村方向に分かれ

て敗走する。第二連隊では、哨兵線を、右翼は緑川太郎兵衛渡しの南堤防から、左翼は住吉海岸に至る線まで配置し、嚴戒態勢をとった。

この方面の薩軍は、緑川の線から北東に押し込められ、後日、南下する政府軍主力と衝背軍との間で挟撃されることになる。

ところで、本史料の冒頭にみる「休戦」とは何か。古今東西を問わず、戦場では、遺体収容や埋葬など、主に衛生面に着眼した戦場清掃のため、彼我両軍が話し合いのういで一時休戦することがあった。遺体収容は、倫理上・人道上の問題でもあり、双方とも受け入れる余地があったとみられる。世間に良く知られているところでは、旧日本軍とソ連および外蒙軍が戦った昭和十四年（一九三九）のノモンハン事件、古くは、日露戦争の際、明治三七八年の旅順攻防戦におけるクリスマス休戦や正月休戦がある。これらは彼我双方の司令官同士の合意によっておこなわれたといわれている。

この史料における「休戦」とは、政府軍と薩軍の当該戦闘地域を所轄する現場司令官の間で合意した休戦とは考えられない。人と人が殺し合う戦場ではあるが、薩軍従軍者の手記などをみると、結構阿吽（あうん）の呼吸で、休戦し合ったことが知られる。『公文録 二』には、次のような文書も綴られている。

休戦之節各旅團長心得

- 一 會議所ヲ設クル事、
- 一 休戦之節八毎日午前第八時ヨリ各旅團長會議所へ參集之事、但各旅團長差支之節ハ
- 參謀ノ内ヨリ必ス出會之事、
- 一 會議所ハ先鋒ノ各旅團ニテ設ケ紙札ヲ以テ之ヲ標スル事、右之

通相定度候条、
御意見候度改度候也、

明治十年四月 黒田參軍

各旅團長

ここにみる「休戦」とは、書かれた内容を見ると、どうやら自軍内部のみに適用される休戦であるようだ。この「休戦之節各旅團長心得」には、交戦当事者のことがまったく記載されていない。すなわち、一方的な休戦であり、当然対敵警戒の処置を、緊張感を継続したうえで実行する必要があった。この時代の戦闘は、相手勢力を肉眼で視認できる範囲から開始される。敵が散開したり、攻撃位置・守備位置に付くあたりから始まるのであって、それまでの行動はお互いに見えているのである。大雨の時など、相手に休戦の意志があれば、それが、「あうん呼吸」で読めるという。この時代までの「休戦」は、現状追認的措施の範疇といえなくもない。

参考までに、八代郡の山裾を松橋・宇土方面に転戦した、別働第一旅団将兵の三月二〇日から四月一日までの死傷者数を掲げておく。なお、別働第二旅団と同第三旅団もこの地域で戦っているが、本稿執筆時現在での死傷者数は把握していない。

※「征討別働隊第一旅団戦闘死傷人員調帳」より作成

(月 日)	(戦 地)	(将校死)	(将校傷)	(下士卒死)	(下士卒傷)	(死傷者合計)
三月二〇日	宮原・鏡	0	0	2	3	5
三月二一日	〃	0	5	16	72	95
三月二二日	〃	0	0	0	2	2
三月二三日	宮原・大野山	2	1	13	50	66



西南戦争当時別働第一旅団 第一連隊長陸軍中佐
 茨木惟昭 (写真は陸軍中將当時)
 大正二年至誠社「華族画報」※旧紀州藩士

次に、別働第二旅団(後の別働第一旅団)が八代から北上する際の戦闘推移をみておきたい。「公文録」中、「征討別働隊第二旅団戦闘報告表」から、日毎の戦闘規模を示しておく。

②別働第一旅団(三月二十九日改称)の松橋進出

三月二十四日	大野山	0	0	0	0	0	0	0	0
三月二十六日	小川進撃	0	2	2	21	21	0	25	1
三月二十八日	浦河内村	0	3	17	29	29	0	49	1
三月三十日	久具村他	0	3	2	27	27	0	32	1
三月三十一日	松橋進撃	0	1	6	13	13	0	20	1
四月一日	宇土進撃	0	1	2	16	16	0	19	1
【合計】		4	16	61	233	233	0	314	1

この報告は、第二旅団第一連隊長茨木惟昭によるもので、指揮下の戦闘員数が正確であることは間違いないとして、対する薩軍兵力は、「一一〇〇人程」と記載されており、これは目視による計数であり、第一連隊の将校団で把握したもので、ほぼ正確と思われる。薩軍兵力は政府軍の二倍強であるにもかかわらず、死傷者数はやや多い。松橋方面へ押し上げられていくところからみても、

三月二十三日 戦闘地：宮原付近

戦闘員：第二旅団第一連隊 514人 薩軍 1100人程
 死傷者(政府軍) 死者 将校・下士卒 7名
 傷者 下士卒 20名

(薩軍) 死者 9名程 傷者 21名程

※政府軍はラッパ1管、スナイドル銃2挺を失う。
 ※薩軍のエンピール銃2挺を鹵獲(ろかく)



スナイドル銃 (日野市新撰組のふるさと博物館)

この宮原付近の戦闘では劣勢に立っていたようだ。

三月二十六日 戦闘地 … 小川村・大野村（下益城郡）ほか

戦闘員 … 第二旅団第一連隊 818人 薩軍 1000人程

死傷者（政府軍） 死者 将校・下士卒 1名

傷者 将校 2名 下士卒 8名

（薩軍） 死者 33名 傷者 40名程

※政府軍はエンピール銃6挺、マント2挺を鹵獲。

三月二四〜二五日にかけては、両軍共に戦線の拡大に伴う塹壕設置などの守備固めをおこなっており、組織

だった戦闘がなかつたのか、この間の戦

闘報告書はない。別

働第二旅団第一連隊

主力は、宮原からさ

らに山沿いに移動し、

小川町占領を窺って

いた。同旅団を含む

衝背軍の総兵力は約

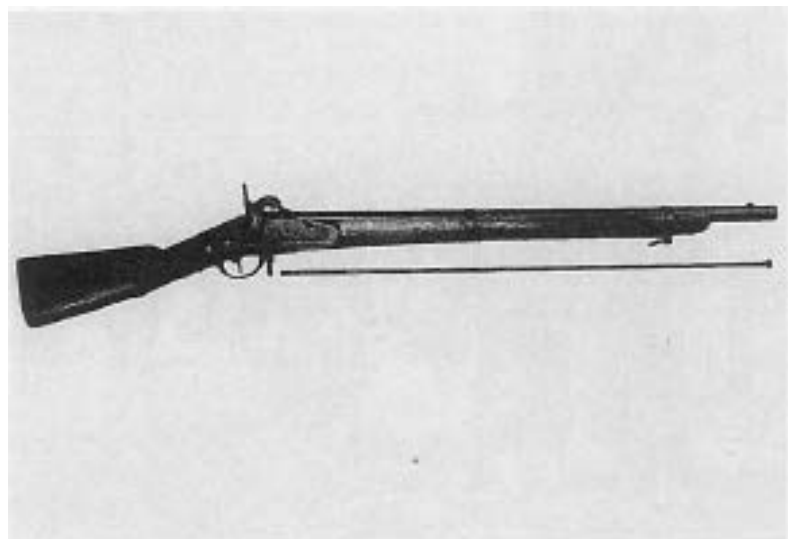
四〇〇〇名、右翼は

北種山から宮原の西

側辺り、左翼は鏡海

辺より同町北辺に至

り、戦列の長さは8



エンピール銃（日野市新撰組のふるさと博物館）

kmほどともいい、黒田参軍は、種山付近の山上にあつて総軍を指揮していた。

三月二十六日 戦闘地 … 大野村（八代郡）・吉本村・小川村

第二旅団第一連隊長陸軍中佐茨木惟昭指揮

戦闘員 … 第一連隊第一〜二大隊 815名

薩軍凡そ1000名

「午後第六時進軍八時頃大野村大野山ニ於テ賊軍ヲ見ル、直ニ開戦賊要地ニ掘リ胸壁ヲ築キ憤戦ス、相待スル凡二時余同十一時頃呐喊進撃之ヲ敗リ北ヲ通テ小川町ニ入ル、凡午后第一時卅分」

別働第二旅団長高島鞆之助大佐は、三月二八日付で少将へ進級する。

指揮下の別働第二旅団は、後統旅団が続々と八代に上陸したため、同

二九日をもって別働第一旅団と改称され、同じく別働第三旅団は別働

第二旅団（旅団長山田顕義少将）となり、別働第四旅団は第三旅団

（旅団長川路利良少将）となった。この改編を受けて、松橋進撃の部

署は次のように定められる。

(一)別働第三旅団は娑婆神の賊を討つ。

(二)別働第二旅団は豊福より賊の右を衝く。

(三)別働第一旅団は鏡より海に沿って進撃する。

これら三個旅団は、薩軍の布陣する立神・宮原・鏡を突破し、松橋への集中を目指しており、三月二六日現在、三個旅団の哨戒線は東西12kmにわたっていた。黒田参軍は、別働第一旅団を左翼に、同第二旅団を中央に、川路少将兼警視庁大警視の警視隊を右翼に配置し、海軍艦船による艦砲射撃の支援を受け、三方から小川に拠つた薩軍を攻撃して、これを撃退する。

三月二七日から

月末にかけて、松

橋を中心に闘った

政府軍は、別働第

一旅団である。松

橋での戦闘は翌

二八日、豊福と浦

川内で始まった。

これは、小川に

あつた別働第三旅

団中村重遠中佐指

揮する斥候大隊が

豊福に偵察進出し

た際、薩軍の反撃

を受けたことによ

る。以下、改称後

の別働第一旅団第

一連隊の戦闘報告から、「松橋の戦」の一コマを再現してみよう。

三月二八日 戦闘地 … 浦河内村 (ママ)

第一旅団第一連隊長陸軍中佐茨木惟昭 (第一大隊第四中隊)

160名 薩軍不詳

「第三旅団應援トシテ本山村ヲ発シ浦河内村ニ於テ開戦午前十時ナリ、賊三方ヨリ囲ミ我ヲハ開戦、午後第二時引揚ク」

現在の宇城市松橋町浦川内である。同日、小川より偵察行動に進出



警視隊横浜港を出発 illustrated London News より

した別働第三旅団中村大隊が豊福に至ると、松橋方面の薩軍と娑婆神方面の薩軍が、「賊三方ヨリ囲ミ」と書かれているように、包囲攻撃を仕掛けてきた。時あたかも、同旅団応援のため茨木惟昭指揮下の一隊が松橋付近に到達しており、急遽偵察斥候部隊の支援に向かったのである。戦闘は午前一〇時頃から始まり、双方午後二時頃に引き揚げたが、これ以上の記載はなく、以後の戦闘はなかったようだ。

三月三〇日久具村、久保村 (ママ)

第一旅団第一連隊長陸軍中佐茨木惟昭 (第一連隊第一大隊第134中隊・第二大隊第123中隊)

942名 薩軍凡そ1000名

「午前第二時宮ノ原ヲ発シ (第一大隊ハ小川ヨリ) 下郷村ニ於テ開戦、賊久具村ニ於テ要害ヲ占メ榴弾ヲ交射シ憤戦最勉ム、午後第六時三十分賊支ユル能ハス退去ル、茲ニ哨兵ヲ配布ス」

三月二十九日夜、別働第一旅団第一大隊は小川に、第二大隊は宮ノ原に露営していた。翌午前二時、闇に紛れて松橋方面へ進撃するが、まもなく下郷村で薩軍の哨戒戦に遭遇し戦闘が始まる。薩軍砲兵は久具村台地上要害に山砲を据え、頻りに榴弾を打ち込んできた。三〇名を越す死傷者を出したが、午後六時半頃には薩兵も支えきれず、後退を始める。第一連隊は、ここに哨兵を配置して滞陣することにした。

三月三一日曲野村、久具村、大野村、松橋村、上野原村

第一旅団第一連隊長陸軍中佐茨木惟昭 (第一連隊第一大隊第134中隊・第二大隊第123中隊)

931名

「午前第八時進撃、直ニ開戦全十一時前ノ山ノ台場ヲ措キ、賊

遂ニ宇土ニ走シ午後一時四十五分松山村ニ到シ、賊火ヲ放テ退ク

前日、久具村で優勢に立つた第一連隊は、翌朝八時に松橋へ向けて進撃する。久具村近辺に対陣していた薩軍は、これを迎え撃つ。しかし一時頃には、大野の砲台を遺棄して松橋村を抜け、上ノ原村から宇土郡松山村・同境目村方向へ撤退し、さらに午後一時過ぎにはこれらの地域に火を放つて木原山方面へ退却する。

四月一日 松山村、境目村、木原

第一旅団第一連隊長陸軍中佐茨木惟昭

「午前第四時、賊哨兵後ヲ□□□直ニ開戦、賊皆抜刀シテ一旦左翼ヲ破ラント雖モ直ニ之ヲ復スヤ進撃地タルヲ逐テ宇土町ニ到ル、其時午前第七時」

第一旅団第一連隊長陸軍中佐茨木惟昭（第一連隊第一大隊第134中隊・第二大隊第123中隊）

946名 薩軍凡そ四百五十名

（薩軍の死者四十名）

③薩軍松橋を放棄

三月三十一日、薩軍は、固執していた松橋を事実上放棄した。翌朝払暁、薩軍の偵察隊は第一連隊の左翼を、音も立てずに襲撃する。得意の抜刀突撃であったが、第一連隊では、準備ができていたとみえ、崩れるようなことはなく、態勢を立て直すと、宇土方面へ転じる敵を追った。そのころ、同旅団第二連隊も、第一連隊のすぐ近くで戦っていた。第二連隊長黒木為楨中佐の報告書をみておこう。

四月一日 熊本県南五里余、松橋及宇土に於て

第一旅団陸軍中佐黒木為楨

「午前第四時賊勢凡六小隊我松橋ノ哨兵前、則チ宇土村ニ來□□斥候隊五六十名計右翼ノ哨兵線ニ切込、以我隊ヲ横ニ射ス時二第一大隊第二中隊ハ其哨兵線中ニ在リ、而シテ我后方ニ回リ抜刀ヲ以之ニ迫ル故、援隊哨兵線ニ増加シ大ニ賊兵ヲ狙撃シ賊斃ル者多シ、拂暁ノ頃賊防ク能ハスシテ退ク、依テ直ニ進テ之ヲ宇土村ノ外ニ追撃」

第一旅団歩兵第二連隊

1048名

薩軍不詳

俘虜3 鹵獲品 砲一門 七連発銃1挺 エンピール銃10挺 刀17本

黒木の第二連隊は、第一連隊のやや東側、宇土近傍にあった。午前四時を期して第一連隊左翼は薩軍偵察隊の抜刀突撃による急襲を受けたが、第二連隊の右翼も威力偵察隊五〇六〇名から、同様の攻撃を受けている。第一大隊第二中隊はその中でほとんど孤立していたが、一隊が薩軍の後方へ移動し抜刀をもって白兵戦を挑み、増援の兵もあって銃撃戦により薩兵を宇土から駆逐した。薩軍の兵員は不詳とされているが、第二連隊の半数程度であったとみられている。

3 戦場の新技術

西南戦争では、当時の軍事技術の粋を集めた武器や新しい通信システム、用兵運用のシステムなど、多くのハードおよびソフトが登場した。小銃などの小火器も、旧幕旧藩において戊辰戦争などで逐次新型

に更新されていたが、明治維新後は国軍たる陸海軍の創設により、軍の近代化が統一的に進むことになる。薩軍の銃は、最新式七連発スペンサー銃やスナイドルなどの一部を除いて、全体的に旧式銃が多く、中には幕末期すでに時代遅れとなっていたゲベルやエンフィールド（エンピール）を多用している部隊さえあった。

政府軍では、戦争期間中を通して外国からの売り込みもあり、常に新型銃を買い込む態勢にあった。多くの銃種が使用されたが、最も信頼を得て主力装備となっていたのは、イギリス製の歩兵銃、スナイドル銃である。これは日本国内でも諸方でメンテナンスされ、小改良を施しながら戊辰戦争後期から薩摩や長州藩軍で多用され、明治陸軍においては、十三年式村田銃を採用するまで、長らく制式銃の地位にあった。

そのほかでは、鋼鉄製大口径砲の存在がある。海軍艦船に装備された各種口径のドイツ製クルップ砲は、有明海や八代海沿岸からの艦砲射撃で、宇土口および八代口からの衝背軍上陸を支援し、拔群の破壊力で猛威をふるった。小火器・重火器ともに数多く輸入されたが、詳細は割愛する。戦場の新技術から、画期的な通信システムたる有線電信の登場、そして時代に先駆けた機関砲（機関銃）などの新兵器を紹介しておく。

①軍用電信

近代戦では、情報を制した方が勝利を収める。西南戦争においても、政府軍優勢を決定づけたのは、軍用電信の駆使と沿岸部における軍艦の活動といわれ、陸軍は工部省管轄の電信とは別に、軍用電信線「軍

電」を侵攻地域に逐次敷設していった。明治一〇年当時、九州管内においても電信網はかなりの拡大をみせている。『征西記稿』の「軍用電線架設表」より、熊本県内電信局開設状況の一部を記す。

三月 船隈 高瀬 木の葉 七元 山鹿
四月 小柳 吉富 妻越 高橋 隈ノ庄 小島

五月 松橋 八代 宮原 御船 佐敷

明治六年（一八七三）二月には、東京長崎間の電信線が開通し、同四月に長崎、一〇月小倉・福岡・佐賀に電信局が開設され、同八年三月には、佐賀―久留米―熊本間が開通し、熊本電信局が開局している。明治一〇年二月一九日、政府は西南戦争の開始直前、電信の私的使用を禁止し、軍の公用専用とした。さらに熊本電信分局（同年分局と改称）を熊本城内に置かれた熊本鎮台営中に移し、三月より九州各地の電信線架設に着手した。その結果、政府軍の作戦面で威力を発揮し、西南戦争後の電信網拡充に大きな役割を果たす。

熊本県下の電信業務は、西南戦争の影響で全国的見地からも早い進展をみている。九州電気通信局編『九州の電信電話百年史』によると、西南戦争期間中に使用された通信機材は、次のようになっていた。

電信銅線 四四二三貫一二〇匁（八八四六円二四銭）
電信鉄線 二〇〇〇斤（二三二円）

電報紙 一七万五二九七枚（八七円六四銭九厘）

電報中継紙 三万二二〇〇枚（一六円一〇銭）

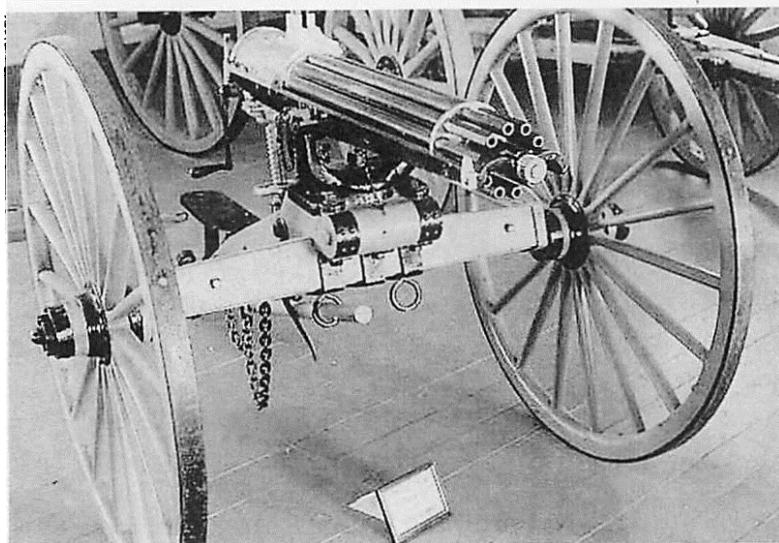
電報受取書 三万七四〇〇枚（五円六一銭）

明治一〇年当時の下級官吏の月給は、当時を描いた小説などからみると、一五円―三〇円程度であった。今ならば、一五万円―三〇万円

といったところか。有線電信であり、大きな設備投資というほどのことでもない。戦時電信所は、陸軍の依頼で工部省が工事をおこなったが、戦場周辺でも、工兵による野戦電信所が比較的簡単に設置されたようだ。

②新兵器の実験場

西南戦争は、当時最新鋭武器の実戦における実験場の趣きがあった。その頃、実用化されていたものにガトリング機関砲とミトラユース機関砲があり、これらは両方とも機関銃とする呼称もあるが、砲車に取り付けられていたことからか、機関砲ともいわれる。ガトリング砲は、戊辰戦争の際にも使用され、長岡藩でも二挺が有効に運用された実績がある。その外にも、薩摩藩が艦載砲として装備したり、幕府海軍の甲鉄艦や旗艦開陽丸にも艦載されている。そ



ガトリング機関砲 (アメリカ合衆国公園局)

のガトリング機関砲とミトラユース機関砲が八代戦線に投入された。ガトリング機関砲は、幕末期以来アメリカより輸入された多銃身式の機関砲である。この時期のものは人力でハンドルを回転させ、給弾・装填・発射・薬莖排出のサイクルを繰り返し、連続射撃をおこなった。ミトラユース機関砲(霰発砲)は、蜂の巣状の砲口を持ち、25〜37発の弾丸をハンドルの回転でほぼ同時に発射でき、フランスから輸入している。

宮ノ原口と鏡口に配置された両機関砲は、機帆走の木造軍艦「筑波艦」に設置されていたもので、日奈久に上陸した黒田参軍は、三月二五日、指揮下の各旅団長へ次の通達を出している。

第十五号 (朱書)

カトリング砲式台、ミタラエス砲壱ツ宮ノ原口并鏡口両所二備へ、砲手随行之内ヨリ分遣隊至候處、衛兵等無之て八到底困難之義二有之候条、各旅団ノ内狙撃ニ熟練之者精撰、一坐二付五名宛差出相成度、尤該地出張本隊長官より進退其他諸事指令可有候、此旨及御達候也、

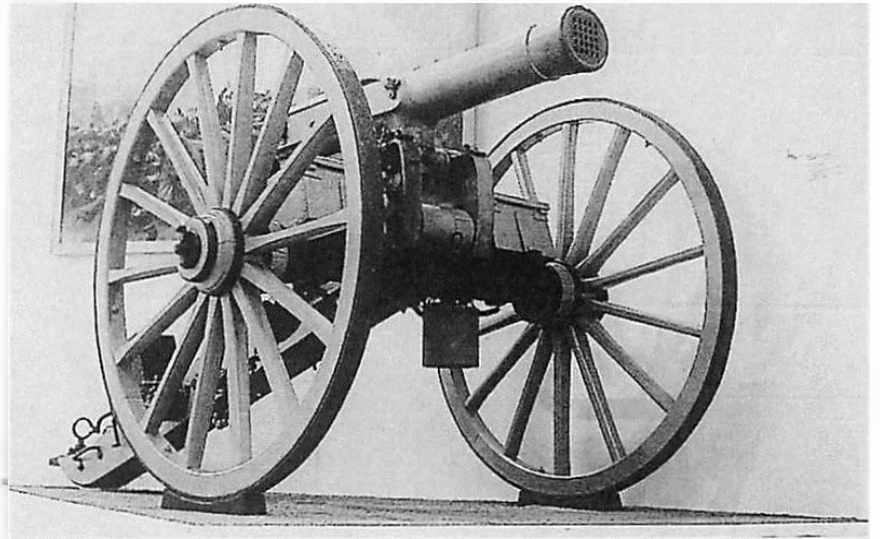
十年三月廿五日 黒田参軍

各旅団長

この通達によれば、砲手として随行してきた兵の中から宮原鏡両口へ分遣隊を編成したが、砲手と機関砲を護衛する兵がいなくては任務を全うできないという。そこで各旅団から、狙撃の熟練者を選抜し、砲一座につき五名を差し出すようにした。八代戦線で実戦使用されたことは間違いないと思われるが、その戦果については記述がほとんど見当たらないことから、大きな効果を挙げたとは考えにくい。

干拓地を主体とした広い八代平野および一部山岳地帯が戦場であった。すなわち、地形的に軍隊が密集した隊形で戦闘を継続することはなく、散開した戦闘隊形がとられたのである。適当な距離をとって散開している敵に対し、機関砲を連続発射しても効果的ではない。相手が艦船のように、敵兵が密集した状態にあるときにこそ、大きな戦果が期待できた。

変わったところでは、ロケット砲も用いられている。この兵器自体は、古代中国が原点といわれ、日本では「石火矢」（火箭）といい、戦国時代から幕末まで諸藩で「備蓄」された。あくまでも武器庫に備蓄されたのであって、現用の兵器としては疑問符が付く。盛大な火の粉をまき散らし、何かに当たると大音響を発し大きな火の玉と化する。焼夷弾として攻城兵器に使えないこともない。これを撃たれると、最初は度肝を抜かれるが、結局、花火の親玉だということが分かって、



ミトラユース機関砲（ドレスデン市ドイツ陸軍博物館）

二回目からは相手に通じなくなる。

西南戦争当時のロケット砲はアメリカ製で、花火の範疇をはるかに超えていた。金属製の躯体に炸薬を詰めた簡単な構造で、主として艦船で信号用に用いられ、自噴式焼夷弾を発射した。政府軍は、艦載されていたものを取り外し、陸戦に使用できるよう改造して一隊を編成したのである。屯田兵関連史料では、五月二六日、人吉ダンゴイ山から薩軍の潜む山田郷へロケットを発射したとの記述がある。命中すれば小口径大砲なみの破壊力を示すが、方向制御に難があったようだ。それでも、小型軽量の山砲とはいえ、二〇〇kg前後の重量があり、山岳戦の運用には相当の苦労があった。一方、ロケット砲は、軽量簡便な発射用具で、ロケット弾体も軽量であるところから、結構利用価値があったとみられる。

明治一〇年当時、北海道開拓使には、五門のガトリング機関砲があった。うち四門は、明治七年にアメリカより購入したものである。そのガトリングとは別途に、同じく開拓使所属のミトラユース機関砲とロケット砲を熊本鎮台の歩兵第十三連隊第一大隊へ付属させた。

熊本鎮臺歩兵第十三聯隊第一大隊

附属

開拓使附属カトリングミタリスロケット砲一隊

第二旅團砲兵第一大隊第一小隊右分隊

分派

第三旅團砲兵遊撃第一小隊右分隊

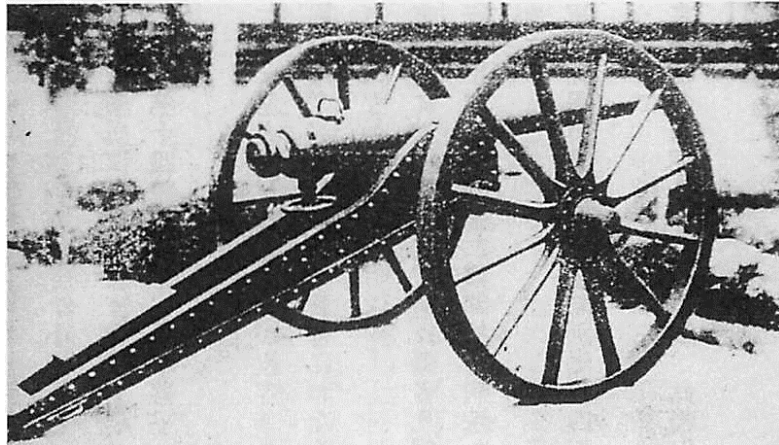
今般他旅團より當旅團へ附属或ハ分派相成候歩

砲隊前書之通ニ候間此段御届申候也、

十年四月十三日 第一旅團司令官

陸軍少将高島鞆之助 ㊦

歩兵第十三連隊は、明治八年（一八七五）四月、熊本鎮台に創設され、現在の二ノ丸公園に置かれていた。この文書は、別働第一旅團高島少将から各旅團司令部へ通告された文書である。内容は、①開拓使付属のガトリング機関砲とミトライユース機関砲およびロケット砲の一隊を歩兵十三連隊第一大隊へ付属させ、さらに同隊を別働第一旅團に付属させる。さらに、別働第二旅團から砲兵第一大隊第一小隊の右分隊を付属。②別働第三旅團の砲兵隊の一部を、別働第一旅團へ分派付属された旨を通告したもので、衝背軍の主力たる別働第一旅團の火力を強化する措置であった。



佐賀藩製造アームストロング砲 bakumatsu meiji kousha shincho より

4 松合病院の開設と兵站基地

山鹿・植木方面で薩軍が劣勢になると、同軍幹部別府晋介と辺見十郎太は、鹿兒島へ帰り補充兵を募集することにした。四月一日には、

彼らが新規徴募の兵約一五〇〇人を率いて人吉に到着していることが判明し、八代奪還を図って来襲するとの情報もたらされる。政府軍八代本営では、八代病院を松橋に移し、その時点の傷病者を長崎へ廻送する段取りを定めた。それに伴い、運輸局出張所の松橋移転も決めている。この情報は正確であった。四月三日、別府・辺見両将率いる薩軍部隊は、球磨川の急流を下って八代に來襲したが、萩原堤で敗北する。

①開院と病舎

松合仮病院は、四月六日をもって開院され、ほどなく松合病院と改称される。同病院の收容者は、四月三日の八代における戦闘での負傷者に加え、三月末の松橋近辺での負傷者、上益城郡御船町や宇土町近辺での戦闘による傷兵が收容されたとみられる。松合病院は、大綱帯所もしくは野戦病院の延長であって、病院たる施設や設備があったわけではなく、宇土郡松合村の民家を徴用して野戦医療の器具や設備を設置し、病院本部・病棟・治療施設としたもので、その割り振りは次ようになっていた。

松合仮病院別紙之通相定、明朝より開院二及候、尚御改各旅團え御通知相成度候也、

十年四月五日

陸軍々医 玉村 巍 ㊦

本営御中

病院

松浦源太郎

會計部

江本秀雄

第一士官室

松浦鐵次

第二士官室

河瀬常喜

屍室 學校

第一號病室	光暁寺	第二號病室	松浦清
第三號病室	江川善次	第四號病室	岩尾榮壽
第五號病室	戸長詰所	第六號病室	草野頼常
第七號病室	大宅善次	第八號病室	松浦源三郎
第九號病室	草野頼繁	第十號病室	小川皆吉
第十一號病室	米倉嘉吉	第十二號病室	川端源吾
第十三號病室	渡邊榮吉	第十四號病室	松本善平
第十五號病室	渡邊林太		

光暁寺から始まる一五の病棟には、何人ほどの傷病者が収容されていたのだろうか。病院資料が見当たらず、一号から一五号にわたる病棟数と、次の史料などより窺うほかはない。

当旅団大綱帶所之儀、過日来宇土二被設置候處、追々傷者凡相増候二付ては醫家人少二有之行届不申、不都合二候間松合病院へ差送り候様致度、此義相伺候也、

十年四月十六日 陸軍大佐黒川通軌（※当時別働第四旅団司令長官代理）

追て本文御改二相成候ハ、其趣松合病院へ御達相成度、此義申□候也、

（回答）

伺之通

但松合病院へ其旅団而已可有之候、（※この部分朱書）

この伺いは、別働第四旅団司令長官代理黒川通軌大佐より征討参軍司令部へ提出されたものである。当該旅団の大綱帶所は、宇土に置か

れていたが、負傷者急増によって医師と介護者が不足し治療が行き届かなくなっていた。そのため、兵站病院的性格を備えた野戦病院、松合病院への負傷者収容を具申ししたのである。

大綱帶所は、前線医療組織としての機能は持つものの、重傷者の場合、応急的な措置をおこなうにとどまる。この伺いに対する回答は、「伺之通」として決裁されたが、「其旅団のみ可有之候」と、但し書が付されており、松合病院で衝背軍全てを管轄させたわけではない。原則的には、次の史料に「各旅団病院」との文言があるように、各旅団ごとに病院を運営していたのである。

各通 八代出張運輸局

各旅団病院

傷痍ノ者并諸品運便ノ為メ、當浦ヨリ長崎其他各地へ船艦出帆ノ都度、前以テ

届出候様可改、此旨相達候事、

明治十年四月三日

松橋本營

また、この命令は、黒田参軍が松橋に本營を設置していた時に出されたもので、負傷者および軍需物資輸送のため、松合より長崎その他へ出帆する艦船の事前届け出を命じたものである。海軍艦船や陸軍の傭船は、水深のある郡浦沖に停泊し、端船で艦船と松合港を往復して負傷者や物資を運んだ。負傷者の多くは、松合から長崎の病院へ送られていたが、これは、政府軍兵士の過半が九州以外からの出身であったこと、復員窓口が長崎であったことも影響している。

以上の要因と、近辺における戦闘報告から推測するところ、少なく

とも累計で数百から千人前後が收容されていたとみてよいだろう。小學校は、遺体を收容する屍室（しかばねしつ）に指定され、靈安室として使用された。抜刀斬り込みもあつて、凄惨な戦場であつたが、政府軍・薩軍共、互いに同郷の者も多かつたことからすると、官薩兩軍の兵士が同じ病舎で相まみえることがあつたのかもしれない。

②病舎規則

民家を借り上げた病舎とはいえ、軍の病院である。入院中、守るべき規律が「病舎規則」として成文化されていた。現在の「入院中の心得」などと比較しても、大きく異なるところはなく、極めて常識的な内容となつてゐる。面白いのは、垣根に上つて花を折つたり、割烹店や妓楼に登楼したりする事を一切嚴禁するとの文言である。輕傷者の中には、病院外に出て酒を飲んで騒ぐ者も少なからず存在したのであろう。この「病舎規則」は、もちろん松合病院に限つた規則ではなく、政府軍管轄病院に共通する規則であつた。参考までに本文を掲げておく。

病舎規則

撰生服薬食品飲料毫モ医官ノ命ニ違フ可ラス、医官回診ノ時ハ病床ニ坐シテ相當ノ禮ヲ為シ前診療后ノ患状ヲ詳告スヘシ、

但シ重傷起臥ニ堪ヘサル者ハ此限ニ非ス、

自己ノ所有物タリトモ医官ノ許可ナキ品ハ舎内ニ携ルヲ許サス、

且ツ私ノ嗜ム處ヲ以テ許可ナキ品ヲ飲食スヘカラス、

入舎中高聲雜談集會并ニ勝敗ニ関スル遊戯ヲ禁ス、

舎内散歩ヲ命スル者ハ櫛側或ハ庭内ヲ徐歩シ舎外散歩ヲ許ス者ハ

散歩牌ヲ

以テ看病人或ハ看病卒ニ隨テ病舎近傍ノ閑地を逍遙シ共ニ定時限ヲ超ユヘカラス、

但シ牆塀ヲ攀チ花木ヲ折り割烹店ニ登ル等ハ一切嚴禁タリ、散歩時間ハ毎日午後第一時ヨリ第三時ヲ限リトシ

浴場ハ午前第十時ヨリ午後第三時ヲ以テ限トス、

看病人看護卒ハ医官ニ屬シ病舎内外ヲ監視シ病者ノ看護ヲ司トル者

ニシテ病者ノ使役ニ供スル者ニ非ス故ニ猥ニ驅使スヘカラス、右嚴守スヘキ者也、

小山内軍医正 長江軍医試補

菊地軍医 森軍医試補

加賀美軍医 佐藤軍医試補

好本軍医副 高田軍医試補

菊地軍医補 浅井軍医試補

横井軍医補 藤田軍医試補

ところで、この時期、松橋には薩軍永山盛弘（弥一郎）指揮下の南下軍の司令部と野戦病院があつた。野戦病院の詳細は判明していないが、正確には、野戦繃帶所といったほうが正しいかもしれない。大野台地の南東方向に位置し、現大塚公園から数百メートルの距離にあつて、大正四年（一九一五）、松橋町列四カ町村立の伝染病隔離病舎敷地となり、その後、避病院が建築されている。薩軍が松橋から完全に撤退したあとの四月一日から四日まで間、黒田參軍は本營を松橋に移すが、その場所が永山南下軍が本營を置いていた、後の避病院用地と

みられている。

③中継基地

西南戦争当時における松合港および松橋の、物流拠点あるいは中継基地としての位置づけを示す史料を、二つ紹介しておく。八代出張運輸局を松橋へ移す旨の通達が出され、八代沖合へ停泊している船舶を、以後は松合近海へ移動させ、物資揚陸の便を図ることを示達した。軍需物資を政府軍へ供給する兵站基地として重視されていたことがよくわかる。

八代出張運輸局

運輸物品取纏メ松橋表へ移転可改旨相達候二付てハ、其局同地へ移転諸事

可取扱、且八代沖合へ停泊之船艘爾後松合近海へ停泊揚陸ノ便ヲ可取計事、

此段相達候事、

明治十年四月三日

八代口本営

△但松合之端船十分無之節ハ八代其他ヨリ

引上ケ急可置候事、

大軍が集中すると、それに応じて大量の物資も必要となる。戦闘が前提であるから、兵站部局は夜も昼もなく活動し、武器弾薬を始め、医薬品や糧食から、衣服および軍靴や靴下など多岐にわたる。変わったところでは、開戦が寒い時期であったので、足指の凍傷予防として大量の唐辛子も用意された。唐辛子を靴下の足指の部分に入れて血液

の循環を促したのである。ほかにも、飲用目的ではなく、消毒用として膨大な量の焼酎が用意され、行軍後の足のケアに頻繁に使用されている。これは、唐辛子と併用することによって凍傷を予防したのである。

兵站基地は、九州各地に置かれていたが、八代口に上陸した衝背軍と共に、会計部局と兵站を担当する各物資調達関連部局も設置されていた。戦線の移動に応じて兵站基地も動く。松橋を拠点とした政府軍も、物流基地としての松橋を重視して次のような通達を發している。

八代出張運輸局

運輸物品取纏メ松橋表へ移転可改旨相達候二付てハ、其局同地へ移転諸事可取扱、

且八代沖合へ停泊之船艘爾後松合近海へ停泊揚陸ノ便ヲ可取計事、此段相達候事、

明治十年四月三日

八代口本営

△但松合之端船十分無之節ハ八代其他ヨリ

引上ケ急可置候事、

結

小川・松橋付近の戦場は、稠密な作戦区域にみえたが、全体的には散漫であった。現在、九州自動車道が南北に縦断していると、ところからやや山よりの線までは準山岳地帯であり、山道と里道が交差し合うところもあって、抛るべき所も多く、攻守互いに難戦を強いられた地域

である。具体的には、北種山から宮之原西端、鏡の北辺が該当し、三方面北進の右翼にあたり、この進撃路を割当てられたのは、川路利良大警視指揮する別働第三旅団（警視隊）である。

左翼は、海岸に至る約12～13 kmにわたる広い地域で、別働第一旅団が受持っている。右翼と左翼の間、すなわち中央部分で進撃を担当したのが別働第二旅団であった。右翼の別働第三旅団は、警視隊で編成されており、士族出身の部隊である。三方面で一番の難険であったとみられ、隘路も多く、薩軍と政府軍、双方からの抜刀突撃もあつて激戦が展開された。

左翼を受持った別働第一旅団は、中央部分を進撃した別働第二旅団と連携して戦ったが、その活動は、大兵力の投入であつたにもかかわらず、広い戦線と相まつて、やや散漫な動線を描く。熊本城攻囲から八代方面へ向けて派遣された永山南下軍は、松橋から三方向に分かれて進んだが、そこから先は、広大な干拓新地があり、拠点を取り合う戦闘が始まる。奇しくも両軍が三方分進となつたが、それぞれの進撃線の交点付近というよりも、町部周辺の要地・要害をめぐる戦いの様相を呈した。

局地に集中した戦闘であれば、さらに多くの犠牲者を出したことだろう。衝背軍および永山南下軍が、互いに三本の進撃ルートを設定したのは、双方の探偵による情報戦の結果もある。素敵方針を守つて進撃したことで、激戦ではあつたが分散した戦いとなり、一カ所に拠つて長期間対陣する消耗戦とはならなかつた。とはいえ、松橋の場合、薩軍が退去する際、町部へ火を放つたため、多くが灰燼に帰したといわれている。小川と松橋は、その周辺地域とともに四通八達した要衝

であり、両軍互いに戦略性を評価した場所であつた。政府軍の県央部分制圧および熊本城開城は、松橋占拠をもつて早まつたとみてよいだろう。

【参考文献および史料等】

- ・ 開拓使屯田事務局編『八代口征討参軍本営公文録』一・同二・同四・同五・同六・同八巻

(北海道立図書館北方資料室蔵)

- ・ 参謀本部陸軍部編纂課編『征西戦記稿』（陸軍文庫一八八七

※青潮社一九八七復刻版上中下巻）

- ・ 九州電気通信局編『九州の電信電話百年史』（電気通信共済会九州支部一九七二）

※平成二六年九月、長年『燎火』編集の労をとられてきた嶋谷力夫氏が永眠された。思えば、一五年間ほどの交誼で、地域に残る多くの近世文書を紹介して下さり、解説の労を煩わせたことも数多い。昨年一月、本論考校了時は、すでに病床にあり、原稿を読んで頂くことも叶わなかつた。痛恨の極みは、掲載された『燎火』を、生前にお届けできなかったことである。天国でお読み頂くことを切に願う。